

在なのだろうと思っていた。このぼくが、まさか群衆の名もなき一人だなんて。しかも、端っこの小さな横顔分の役割しかないなんて。それでもぼくは、学校の誰かが新聞の写真に気付くのではないかと、二日ばかり期待していたが、家族以外に気付いた人はいなかった。

学校と塾と家のまわりと、ぼくの名前を知っている狭く、景にとけ込んだ雑踏の一部だ。ぼくはここにいるのに、背れも気付かない。ぼくはみんなと同じような、誰かにすぎない。だからこそ、ぼくは毎日、受験勉強を続けられたのだと思う。ぼくが日常の少し外側の世界に出ることになっても、自分の名前が通るような人間になりたかったのだ。群衆の一人やどこかの誰かではなく、ぼくがぼくであることを、一人でも多くの人に知ってほしかったから。

第一志望の中学校に合格した時、ぼくは、同級生のなかの誰よりも大きい歩幅で、世界の中心に向かうための第一歩を踏み出したのだ、と誇らしく感じていた。

しかし、毎日コツコツ努力してきたぼくのちっぽげな成功なんて、一瞬で吹き飛んでしまった。ぼくと同級生の名前が、その日のうちに日本中に知れ渡ることになったからだ。ある男に、殺されたために。

※

制服の採寸や教科書の販売の時にはあまり実感がなかつ

たが、春休みが終わり学校が始まると、ぼくは合格したのだ、という喜びがぶり返してきた。清潔で機能的な校舎に、心が躍る。そこにはぼくと同じように選ばれた新しい仲間が待ち受けている。

教室には、系列の進学塾の模擬テスト会場の顔なじみの姿がちらほらあった。これから一年間使うことになるロッカーや机のまわりを確認し、近くにいたやつに挨拶をする。一人に話しかけると、話し声に引き寄せられるように四、五人が集まり、即席のグループになった。みんな、一人のままでは落ち着かないので、とにかくつるむ相手が欲しいのだ。名札を確認し、出身小学校や進学塾を名乗り合う。ぼくの番の後で、背の低い色白のぼっちゃり男がぼくに言った。「それじゃあAって、佐川力くんと同じ小学校？」

その場にいた半数以上が、この二か月に何度も耳にした名前にびくりと反応した。そして、ぼくに視線が集まる。「そうだよ。卒業式には、テレビ局のカメラがたくさん来てた。父親が来て、卒業証書をもたらってたよ」

「佐川って誰？」

ぼんやりしたやつが訊くと、みんなは口々に答えた。

「殺された子どもだろ。通り魔に」

「十三人殺傷事件の、死んだうちの最年少」

「ちょっと前までは、そのニュースばかりだったろ」

「おれ達と同じ年なんだよな。驚いたよ」